

松江市立鹿島歴史民俗資料館だより

No.43

2025年4月発行

■ 6000年前の台所事情－佐太講武貝塚の出土品から

鹿島歴史民俗資料館から歩いて10分くらいのところに佐太講武貝塚があります。鹿島中学校付近の佐陀川の両岸の広い範囲から縄文土器やシジミの貝殻などが採集され、古くから遺跡の存在が知られていました。鶴灘貝塚とも呼ばれていましたが、昭和8(1933)年に佐太村と講武村にまたがることから佐太講武貝塚として国の史跡に指定されています。

平成5・6(1993・94)年に史跡実態確認のためのトレンチ調査が行われ、南側(佐陀宮内側)で貝層本体がみつかりました。貝層はほとんどがヤマトシジミで構成され、一緒に出土した土器から縄文時代前期(約6000年前)のものとなっています。長さ7m以上、厚さ1mにおよぶ貝層は西日本では縄文時代のものとしては最大です。



貝層は佐陀川に向かって広がっていましたが、江戸時代中期、清原太兵衛による佐陀川開削で貝層の一部は掘り上げられ、周囲の土捨て場へ運ばれました。

貝塚とは大量の貝殻を中心とした、いわゆる「ゴミ捨て場」で、全国各地で見つかっています。ただ、貝塚内に埋葬する例や住居近くに形成することから、当時の人々にとっては単に「いらぬものを捨てる場所」だけでない、それ以上の意味を持つものだったと考えられます。

貝塚では、貝に含まれるカルシウムで保護されるため、

動物や魚の骨が良好な形で見つかります。当時、どんなものを食べていたかを知ることができるわけです。

佐太講武貝塚では、動物骨ではイノシシ・シカが多く、他にも、テン・アナグマ・タヌキ、魚骨ではフナ・ナマズ・クロダイ・ベラ・イシダイ・コブダイなど淡水魚や海水魚が出土しています。出土品に、黒曜石で作った矢じり、鹿角製のヤス、石錘などがあり、弓矢で狩りをし、魚をヤスで突いたり網で捕る、近くの汽水域でシジミを獲る、そんな姿が想像できます。



ドングリの殻もまとめて捨てられています。アク抜きした後すりつぶし、団子にして焼いたり深めの縄文土器でほかの食材と煮込み料理などにしたのかもしれませんが。貝層の土壌中から検出された植物遺体は59種にのぼります。そのうち食用可能なものはクワ属、マタタビ、サルナシ、ブドウ属、フユイチゴ、ヤマボウシ、タラノキ属などがあります。佐太講武貝塚を形成した縄文人たちはシジミのほかにもいろいろな種類の食べ物を食べていたようです。



佐太講武貝塚からは犬の骨も出土しています。成犬のメスの頭蓋骨で、最大頭長14.5cmという小型の縄文犬のものです。狩りなどに使われた犬だったのでしょうか。ただ、骨には解体痕が見られることから、最後は食料になったと思われます。

資料館では、佐太講武貝塚の出土品とともに貝層断面の剥ぎ取りパネルを展示中です。

